
遊戯王 ああっ破滅の女神さまっ

ダルクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 ああつ破滅の女神さまっ

【Nコード】

N2849Z

【作者名】

ダルクス

【あらすじ】

ある日、死んだ父の形見として、主人公の元に届けられた二枚のカード。それは世界を破滅させるほどの力を持つカードの精霊、『破滅の女神ルイン』を宿すカードと、彼女専用の儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードだった。これは、数奇な運命に翻弄される一人の青年、そして「破滅」の力を司る女神と、彼らを取り巻く精霊たちの長きに渡る闘いの物語である…。

第1話：「出会い」（前書き）

皆さん初めまして、ダルクスと申します。

このサイトで小説を書くのは初めてなのですが、皆さんのご期待に添えられるよう、頑張っていきたいと思えます。

この作品の舞台は5D・sの延長線上の世界となります。

5D・sとZEXALの中間あたりだと考えていただきます。

故に、シンクロモンスターもモンスターエクシーズに加え、原作、アニメ、ゲームのキャラも登場予定です。

主人公はオリジナルの主人公です。

それでは、始めさせていただきます。

第1話：「出会い」

…「デュエルモンスターズ」。

名前を聞いたことがない人はまずいだろうと言われている、この全世界で爆発的なブームを巻き起こしているカードゲームには、ある一つの不思議な噂がある。

それはごく稀に、このゲームを心から愛している者の前にだけ現れるといわれているカードの精霊の存在…。

これは、数奇な運命に翻弄される一人の青年、そして「破滅」の力を司る女神と、彼らを取り巻く精霊たちの長きに渡る闘いの物語である…。

第1話「出会い」

…親父が死んだ。ついひと月前の事だ。

俺の親父は考古学者だった。常に世界中を旅して渡り、帰ってくるのは一年に片手で数えるくらい。たまに帰ってきたかと思えば、怪しい発掘品やオーパーツを土産に渡される始末。はつきり言ってダメ親父の印象しかない。

しかし、そんなダメ親父でも、死んだと連絡が入ったときは悲しかった。

たった一人の息子を残して、親父は外国の遺跡発掘の調査の途中に落盤事故に遭い、そのまま帰らぬ人となった。

親父には兄弟も親戚もない…故に俺を引き取ってくれる身内などいなかった。しかし、親父が死んだ後も、寂しいという気持ちには不思議とならなかった。きっと、親父の帰ってこない生活に慣れてしまっていたからだろう。

そんな親父の葬儀も終わって一段落し、ひと月ほど経ったある日、俺の家に小包が届いた。差出人は親父の研究グループの一人からだった。

包みを開くと、まず差出人が書いたと思われる手紙が入っていた。

『君のお父さんが自分にもしもの事があった時、君に渡してほしいと言われていた物だ』

手紙にはそう書かれていた。改めて届けてくれた物を見る。

「箱…？」

それは小さな箱だった。いや、おそらく親父が渡したかった物はこの中に入っているのだろう。

俺は蓋に手をかけ、ゆっくりと開ける。

「これって…カード？」

箱の中身はデュエルモンスターズのカードだった。箱をひっくり返して、掌の上にあけてみると、二枚のカードと一枚の紙切れが落ちてきた。

俺はまず、紙切れの方を手にとってみた。そこには親父の字で、こ
う書かれていた。

『某国を冒険中、私は精霊が宿るといわれているこのカードを発見
した。だが精霊が出現するのは限られたデュエリストの手に渡った
時のみと言われている。どうやら私はそれに値する人間ではないら
しい…。お前になら、このカードが応えてくれるだろうと、私は信
じている』

相変わらず、実の息子に宛てたとは思えないほどに堅苦しい文面の
手紙を見て、俺は少し懐かしい気持ちになった。

そして改めて、カードの方を手にとってみた。最初は半信半疑だっ
た。確かに俺も精霊の噂は聞いたことがあるが、それは所詮噂程度
の物だと思っていた。

また紛い物を掴まされたんじゃないかと思い、まじまじとカードを
眺めてみる…。その時だ！

カッ！

「うわっ…！？」

突然カードが光を放ち、俺は思わず握っていた二枚のカードを床に
落とし、後ろに倒れ込んで腕で目を覆った。

光が止み、ゆっくりと目を開けてみると…。

「…？」「…？」「汝、世界の破滅を望む者か？我が主よ…。」

目の前には一人の女性が立っていた。
流れるような銀色の長髪…碧い瞳…そして手には赤いロッドを握っている。

「だ…誰…？」

面喰っている俺に対し、その女は静かな声で答える。

??? 「我が名は『破滅の女神ルイン』。主のお呼びに与り、ここに顕現した」

これが俺と、破滅の女神ルインとの出会いだった…。

「…どうしてこうなった」

今、自分のことを「破滅の女神」と名乗った謎の女性ルインは、居間でこの状況を頭の中で必死に整理している俺の前に対峙して正座している。

「え〜とつまり…死んだ親父から送られてきたカードが実は本当に精霊の宿るカードで、あんたはそのカードに描かれている破滅の女神ルイン本人だっというのか？」

ルイン「その通りだ、主よ」

「マジかよ…」

今まで親父から送られてきた物は、みんな紛い物か偽物ばかりだった。今回もきつとその類だと思っていたら…親父の奴、最後の最後でとんでもない物を置き土産に置いてきやがった。

ルイン「主よ」

「…ん？」

ルイン「主はもしかして世界の破滅を望んで私を顕現させたわけではないのか？」

「いや、残念ながら…俺はこの世界を一度も破滅させようなんて思ったことはないし、あんたを呼ぶ気もなかった」

ルイン「では何故…？」

「こつちが聞きてえよ…」

でもまあ…呼んじまったもんは仕方ない。わざわざ呼んでおいて「帰って下さい」なんて言えないし、それにこの人…：なかなか美人だし…。

ルイン「ん？何か言ったか主？」

「い、いやなんでもない！まあとりあえず、あんたが本当にカードの精霊だっというなら何か精霊らしいことをしてみてくれ」

ルイン「精霊らしいこと…？」

「そつだ。あんたが普通の人間じゃないっていう証拠を」

ルイン「ふむ…わかった」

そう言つてルインは立ち上がり、家の縁側の方に歩み寄っていく。

「…？」

なにをするつもりだろう？と疑問に思いつつ、その様子を見守る。ルインは縁側の戸を開け、庭に向けて手を持ったロッドを翳す。すると…。

ルイン「…ハッ！」

短い掛け声があがり、ロッドの先から火の玉が放たれ、庭に飾つてある灯籠に命中に、粉々に碎け散つた。

「なっ…！？」

ルイン「どうだ主、これで満足か？」

若干誇らしげな顔で俺に語りかけるルイン。

「え…？あ…はい…すごい…ですね」

ルイン「こんなもの、私の力の一部にすぎない。なにはともあれ、これからよろしく頼むぞ、主」

呆然とする俺の前でルインはさらに誇らしげな顔をした。

「は、はい…」

軽い気持ちでルインを迎え入れたのだが…どうやらとんでもなく「こ」とになりそうだ。

第1話：「出会い」（後書き）

皆さん初めまして、この度この小説を書かせていただくダルクスと申します。

何故よりによつて破滅の女神ルインなのかって？

答えは簡単、私が好きだからですw

なにはともあれ、これからよろしくお願いします。

第2話：「女神様との楽しい(?) お買い物」

「こんなもんかな」

一人机に向かっていた俺は、たった今組みあがったデッキを机の上に置いて小さく呟いた。

ルインが現れて一日経った今日、俺は『破滅の女神ルイン』と、それ専用の儀式魔法カード、『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードを、なんとかしてデッキに組み込もうと模索していたのだ。元々、俺のデッキは儀式専門のデッキではなかったのだが、この二枚のカードの投入により俺のデッキの方向性がガラリと変わった。

「さて、今日はどうするか…」

デッキが組みあがってひと段落した俺は、休日の午後をいかにして過ごすかを考えた。

「なあ、ルイン」

ルイン「む？」

俺の部屋の端でずっと膝を抱えてテレビを見ているルインに、俺は声をかける。

「今日の午後、どこか行きたい場所はあるか？」

ルイン「私は特に…一日中このテレビという物を見ていてもいいのだが」

どうやらこの女神様、テレビをさぞ気に入ったご様子だ。

ルイン「このテレビという物は凄いな、これを見ているだけで大抵の情報を得ることが出来る」

全く…テレビが好きなカードの精霊なんて…。

「そういえば、カードの精霊は他人には見えないっていう噂があるんだが、お前はどうなんだ？」

限られた者にのみ見ることができるとされているカードの精霊…その存在が見えない人に対しては、見える者がただの不思議ちゃんか電波扱いされるといふ話をよく聞く。

ルイン「主よ、私をそんじょそこらの精霊と一緒にされては困るな」

「どういう意味だ？」

テレビから目を離すことなくルインは話を続ける。

ルイン「精霊は精霊でも、私は女神という存在だ。他の精霊とは精霊としてのランクが違う。故に一度この世界に顕現すれば、主以外の人間でも私の姿を目視することができる」

「ようは俺以外でも姿が見えるってことか…よし」

それを聞いて俺はある決心をし、席を立ち、ルインの元に歩み寄る。

ルイン「どうした主？」

ようやくテレビから目を離し、俺の方を見上げて不思議そうな顔をするルイン。

「午後の予定が決まった。俺と一緒に買い物しに街に行くぞ」

ルイン「私も行くのか？」

「当然。お前の姿が誰にでも見えるっていうなら、まずは普通の服を手に入れなきゃいけないからな」

いくら本物のカードの精霊とはいえ、その存在をおおっぴらに世間に広めるわけにはいかない。出来る限りこのルインに普通の人間としての振りをさせておかないと…。

ルイン「うむ…わかった、主の命令では仕方ないな」

ルインは大人しくテレビのリモコンを手にし、テレビの電源を切る。

ルイン「では、行くでしょうか主」

「待て！」

なに食わぬ顔で部屋を出ようとするルインに俺は待ったをかける。

ルイン「なんだ？」

「その格好で外に出るわけにはいかないだろ…」

第二話：女神様との楽しい(?) お買い物

ルイン「あ…主よ…この格好はさすがに…」

「我慢してくれ」

そんなこんなで俺とルインは街に出ることになった。

で、問題なのはルインの格好なのだが…さすがにあの格好のまま表を歩かせるわけにもいかず、今は俺が授業で体育のときに使うジャージを着せている。

幸い彼女の背が高いおかげで、男用のジャージは無理なく着せられたのだが…それでも長い銀髪に不釣り合いなものには変わらず、周囲の注目を集めることになった。

ルイン「これからどこに行くのだ？」

「ひとまず、デパートに行こう。服もあるし、他にも食品とか買い物しなきゃいかんからな」

……

……

…

ルイン「おお！なんだこの動く階段は!？」

「エスカレーターだよ」

デパートに到着して早々、ルインは動く階段ことエスカレーターに驚きの声をあげた。

現代のたいていの知識はテレビで学んだらしいのだが、どうやらエスカレーターの存在まではまだテレビでは見なかったらしい。

ルイン「なるほど、乗っているだけで前に進むのか。これはなかなか楽しいものだ。よし、もう一度乗ってくる」

「頼むからやめてくれ」

……

……

…

「さあて、まずは服を……ってあれ？」

エスカレーターを乗り継ぎ、婦人服売り場まで来た俺だったが、ふと後ろを振り向くとさっきまで後ろに付いてきていたはずのルインの姿がない。

「あいつ……どこに行ったんだ？」

こんな広いところであんな右も左もわからない女神を野放しにすれば、何をしでかすか分からない。急いでルインを探そうと、俺は上ったエスカレーターを一旦降り、下りのエスカレーターに乗ろうとした、その時。

ピンポンパンポーン

『迷子のお知らせを申し上げます』

突然チャイムと共に場内アナウンスが流れた。

「ん？」

『え〜…破滅の女神のルイン様の主様。迷子センターにて……』

この時、俺はすでに脇目も振らず走り出し、迷子センターへと駆け抜けていった。

……

……

…

迷子センターに到着し、俺はその扉を開ける。

「ルイ……なっ！？」

そこで目にしたのは…何とも衝撃的な光景だった。

ルイン「や、やめっ…こらっ！やめろ〜！」

子供A「あははっ！おねえちゃんよわ〜い！」

ルイン「こ、こらっ！服を引っ張るな！」

子供B「ねえ、なんでおねえちゃんのかみぎんいるなの〜？」

ルイン「痛っ！ちよっ、髪を引つ張るな〜！！わ、私は破滅の女神なんだぞ！？」

迷子センターにいた、迷子になっているちびっ子達に襲われ……もとい遊ばれていた。3、4人の男の子や女の子に押し掛かられている。

係員「あ、ルインさんの主さんですか？」

面白いのでしばらく見ていたら、迷子センターの係のお姉さんが俺に話しかけてきた。それにルインも俺に気づいたらしく、

ルイン「あ、主！た、助けてくれっ！」

少々涙目で俺の後ろに隠れた。女神がちびっ子を恐れてどうする…。

「あ、すみません。うちの……えっと、姉がお世話になって」

言った後でなんだが、正直この嘘はどうかと思った。だって片やのどこにでもいる普通の純日本人の青年と、片や髪が銀色で十人に聞いたら十人とも美人だと言うほどの整った顔立ちをしている破滅の女神様だぜ？ジャージ着てるけど…。

係員「お姉さんなんですか？」

「は、はい。つい最近まで海外に住んでたものですから、その…ここでの常識がちょっと…」

やはりこのごまかしは無理があるか…と思ったが。

係員「ああ、そうなんですか。次からはお姉さんから目を離さない
てくださいね？」

「は、はい」

意外にも物分かりの良いお姉さんでホツとしつつ、俺はルインの手
を引いて迷子センターの扉を開けた。

子供C「ばいばい、めがみのおねえちゃん！」

子供D「またカイバーマンごっこしようね」

その際、何人かのちびっ子達に見送られた。

ルイン「う…うむ、バイバイ」

若干疲れた表情をしてルインは応え、俺とルインは迷子センターを
後にした。

「ルイン…またなんでこんな所に？」

ルイン「い、いや…あの動く階段に乗っていたら、いつの間にか…」

「はあ…お前なあ、これからは俺の傍を離れるなよ？」

ルイン「わ、わかっている！」

先ほどのちびっ子との戯れがトラウマになってしまったのか、微妙
に落ち込み気味なルインを引き連れて、俺達は買い物を続行した。

……
……
……

「へえー、新しいストラクチャーデッキ出たんだ。今度は除外とドラゴンが主体のデッキか…」

おもちゃ売り場にて、俺は新発売のデュエルモンスターの新しい構築済みデッキを見ていた。

ルイン「おい主、この『ぶらじゃー』というのはどうやって使うんだ？」

その時、またどこかに行っていたルインは、この場にもっとも相応しくない物を手に持って、俺の前に広げて見せてきた。

「黒か……じゃなくて！そんな物どっから持ってきた!？」

ルイン「らんじえりーうりば、と言う所からだが」

「すぐに戻してこい!」

ルイン「何故だ？あ、そうだ。私にはよく分からないから主も一緒に来て選んで……なぜ主は顔が赤いんだ？」

「いいから戻してこい!」

俺の顔に覗き込んでいるルインの手を引いて、ルインが持ってきた下着を元の場所に戻しに行った。その際、周りの人からのクスクス笑いが心に痛かった…。

……
……
……

「はあ…なんだか凄く疲れてきた」

ルイン「いや、買い物とはなかなか楽しいものだな」

こっちは全然楽しくない！と、心の中でルインにツッコみつつ、俺は何気なく掲示板に張られてある広告を目にした。

「デュエルモンスターの大会…？今日午後三時から屋上でか…」

どうやらこのデパートで、これからデュエル大会が開かれるらしい。

「へ、優勝賞品はこのデパートで使える一万円分の商品券か。新デッキも試してみたいし、ちょうどいいかもな」

ルイン「なんだ主、この大会とやらに出るのか？」

「ああ。参加自由らしいし、優勝すれば金も浮くし、デッキもデュエルディスクもカバンの中にあるしな」

そうやって俺はカバンの中にあるデュエルディスクとデッキえおルインに見せる。

デュエリストたる者、この二つは常に持ち歩いてないとな。

ルイン「このデッキに、私のカードが入っているのだな」

「そつだ。受付は二時半からか…よし、すぐに屋上に行くぞ」

ルイン「うむ、わかった」

俺達はエレベーターに乗り、屋上へと向かう。

その際にまたルインが「動く部屋だ」と言って騒いだのは、言っまでもない…。

続く。

第2話：「女神様との楽しい(?) お買い物」(後書き)

次回からはいよいよデュエル回です。

そういえば今日はリアルでドラゴニック・レギオンの発売日でしたね。

私もこれから買いに行ってきますノシ

第3話：「装着！甲虫装機（インゼクター）コンボ」

「『スピア・ドラゴン』で守備表示の『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！
ドラゴン・スクリュー！！」

「うわ〜！負けたあ〜…」

「お、やってるやってる」

俺達が屋上に着くと、二人の小学生がステージの上でフリーデュエルをしていた。

ルインは熱心にその様子を眺める。

ルイン「あれがこの世界でのデュエルが、すごいな。モンスターがまるで本物みたいだ」

「ああ、ソリッドビジョンシステムとかいうのでカードを立体映像で映しているんだ」

この世界でのデュエルを俺なりにわかりやすく伝えつつもりなんだが：ルインは頭の上に「？」の字が浮いているかのような顔をして首を傾げる。

「ま、まあ俺も詳しい仕組みはよくわからないんだけど、要するに幻想さ」

ルイン「幻想か…なるほど」

どうやらこの説明で納得してくれたみたいだ。

「さうとと、受付場所は…」

「???」あれ?おゝい!こんなところで何してるの?」

「ん?」

遠くから俺を呼ぶ声が聞こえる。

俺は声のした方を見ると、その声の主は小走りでごっちに走ってきた。

「あれ?アリアじゃん、なにやってんだ?こんなところで」

第3話：装着！インセクター甲虫装機コンボ

アリア「こんにちは」

「こんなところで会うなんて奇遇だなあ、アリアもデュエル大会に出るのか?」

アリア「うん。買い物についてだけどね」

楽しみに答える彼女の名前は加護アリア。俺の高校のクラスメートにして、小学生の頃からの幼馴染だ。

頭の横で二つに束ねたくり色の髪と、最近視力が落ちてきたのか厚い眼鏡と、そして発育がいいのか…大きい胸が特徴的の女の子だ。

ルイン「主？この者は…」

アリア「あれ？そっちの方は？」

「あ！え」と…」

そうだった…ルインのことをすっかり忘れてた。

まさかカードの精霊だなんて言えるはずないし…ここはひとつ、またあの嘘でごまかすか。

「お、俺の姉のルインだ。(……………あつ！)」

しまった！ついはずみで言ってしまったが、アリアは俺の幼馴染じゃないか！

さっきの迷子センターのお姉さんならまだしも、さすがに幼馴染ではごまかしが効かないか…？

アリア「え？お姉さん？本当に？今まで全然知らなかったよ」

「い…いや俺もつい最近知ったんだけどな、どうやら親父の奴、俺が生まれる前に海外で別の女の人と関係持ってたらしくって…」

アリア「へ〜、あのあじさんがねえ…。昔から真面目で無愛想だったけどそんな一面もあったのね」

親父「…すまん！死んだあんたにあらぬ誤解を受けさせるハメになっちまった…」。

アリア「改めてよろしくお願いします、お姉さん。私、加護アリアっています」

ルイン「うむ、よろしくなアリア。しかし主にも年頃の女友達がいとはな」

アリア「え？あるじって？」

「げっ！？えつと、それは…」

『間もなくデュエル大会を開催いたします。受付を済ませていない方は受付カウンターまでお越しください』

その時、タイミング良くアナウンスが会場内に響き渡る。

「お、おいアリア！まだ大会受付してないだろ！早く受付に行こうぜ！」

アリア「あ、うん。そうだね」

この場をなんとかごまかそうと、俺はアリアを受付場まで誘導させた。

その後、ルインを端の方まで連れて行ってこう言った。

「いいか？俺とお前は姉弟ってことになってんだから話を合わせるよ？」

ルイン「うむ、わかった」

「それともう一つ、誰かの前で俺のことを呼ぶときは『主』って呼び方はやめろよ」

アリアに俺が変な趣味の持ち主だと誤解されたらかなわんからな…。

ルイン「わかった、ある…弟よ」

「よし…それでいい。じゃ、俺も受付行ってくるから」

ルインをその場に残し、俺は大会の受付にへと向かった。

ルイン「…弟か…懐かしい響きだな」

……

……

…

「『デュナミス・ヴァルキリア』でダイレクトアタック！」

決闘者「うわ〜！」

L P O

俺は自前のデッキで順調に勝ち越せていった。

どうやら新デッキの力は、なかなかのものらしい。

ルイン「すごいじゃないか主！三連勝だぞ！」

デュエルが終わるとステージを降り、応援してくれていたルインの元に戻る。

「伊達に数年間やってないよ」

大会は16人のトーナメント制で行われている。今ので準決勝だったから、次で決勝戦だ。

「ということは決勝戦の相手は……」

『間もなく決勝戦を行います。準決勝を勝ち抜いたお二方はステージ上にお上がり下さい』

アナウンスがかかり、俺はステージにへと向かう。

ルイン「主、頑張れよ！」

「主はやめろって……行ってくるよ」

ステージに上がると、ステージ下のギャラリーからルインが顔を覗かせる。

そして決勝戦の相手が、俺の前に対峙する。

「やっぱりお前か、アリア」

アリア「久しぶりだね、こうやってデュエルするのは」

「だな、だが勝つのは俺だ！」

アリア「望むところよー！」

「」デュエル！！」

「先攻は俺からだ、ドロー！」

俺は高らかにデッキからカードをドローする。

「まずはこいつだ、『終末の騎士』を召喚！」

フィールドにボロ布と黒い甲冑を纏った騎士が現れる。

【終末の騎士】 4 ATK/1400 DEF/1200 闇
戦士族

「『終末の騎士』が召喚に成功したとき、デッキから闇属性モンスター1体を墓地に送る。俺は『儀式魔人プレサイダー』を墓地に送る」

アリア（今までのデッキには無かったカード…ふーん、デッキ新しくしたんだ）

「先攻は最初のターン攻撃できない。俺はこれで、ターンエンドだ」

手札：5枚 LP：4000

アリア「私のターン、ドロー」

ジャンプしながら楽しそうにカードをドローするアリア。

アリア「ふっふっん、いいのかな？そんな無防備なフィールドで私にターンを明け渡して」

「なに？」

アリア「私のモンスターは…これ！来て、インゼクター 甲虫装機 ダンセル」

「

アリアのフィールドに赤いイトトンボを模した格好をしたモンスターが召喚され、銃を構える。

【インゼクター 甲虫装機 ダンセル】 3 ATK / 1000 DEF / 1800

0 闇 昆虫族

アリア「さらにさらに！『ダンセル』の効果発動 1ターンに1度、手札の『甲虫装機』と名のついたモンスターを『ダンセル』に装備することができる！私は手札の『甲虫装機 ホーネット』を『ダンセル』に装備 いくよ、ゼクト・イークイップ」

『ダンセル』の右腕に、『ホーネット』のパイルバンカーが装着される。

「そして『ホーネット』を装備したモンスターは、攻守を『ホーネット』の分までアップさせ、レベルを3つ上げる！ ホーネットの攻撃力は500、守備力は200、よってその数値分アップ！」

甲虫装機 ダンセル：ATK/1000 1500 DEF/1800 2000 3 6

ルイン「攻撃力が『終末の騎士』を超えてしまったぞ!？」

「いや…それだけじゃない！」

アリア「いつくよ」 装備された『ホーネット』の効果発動 装備状態のこのカードを墓地に送り、相手フィールドのカード一枚を破壊する！射出！ ポイズン・バンカー！！！」

『ダンセル』に装着されたパイルバンカーから杭が放たれ、それは『終末の騎士』の身体に突き刺さり、毒によって蝕まれ、消滅した。

「やっってくれるな……」

甲虫装機 ダンセル：ATK/1500 1000 DEF/2000 1800 6 3

装備カードが無くなったために『ダンセル』のステータスは元に戻るが…ここからが本当の地獄だ…！

アリア「そしてここで『ダンセル』の効果発動 このカードに装備

された装備カードが墓地に送られた場合、デッキから他の『甲虫装機』を特殊召喚するよ！来て！『甲虫装機 センチピード』」

【甲虫装機 センチピード】 3 ATK/1600 DEF/1200 闇 昆虫族

ルイン「イトトンボの次はムカデか…」

アリア「そして『センチピード』の効果発動！今度は墓地から『ホーネット』を装備するよ？ ゼクト・イーキューツプ」

『センチピード』の右側の Cutter が消え、代わりに『ホーネット』の Pail Banker が装着される。

アリア「そして攻守・レベルともにパワーアップ」

| | | | | |
|------|--------|------------|------|----------|
| 甲虫装機 | センチピード | : ATK/1600 | 2100 | DEF/1200 |
| | | | 3 | 6 |

アリア「フィールドにモンスターは無し…よしっ！バトルフェイズいくよ！まずは『ダンセル』でダイレクトアタック！ターゲットロツク！ダンライガン、シュート！」

『ダンセル』が銃の照準を俺に合わせると、スコープ越しに俺を狙い撃つ！

「ぐっ…！」

LP4000 3000

アリア「まだまだ攻撃は続くよ！さらにパワーアップした『センチ

ピード』でダイレクトアタック！斬り裂け！ センチュリオン・カッター ー！！」

『センチピード』はカッターをまるで手裏剣のように投げ放ち、俺の身体を斬りつける。

「ぐああっ…！」

LP3000 900

ルイン「なっ！？ある…弟のライフが、わずか1ターンで1000以下にまで減らされただど！？」

ルインが驚くのも無理はない…。

アリアが使うモンスター群…『甲虫装機』。個々のモンスターの能力は決して高いとはいえないが、互いが互いを強化しあうそのコンビネーションはかなり強力だ。

俺も何度このコンボに苦しまれたことか…。

「だがお前はいつもツメが甘い。俺のライフをいつもあと一歩までは追いつめるが…結局はそこまで、最後はペースを乱して逆転される」

ルイン「へ？そうなのか？」

「ああ、こいつとデッセルしてると序盤はもう少してとこまで攻めてくるんだが、それ以上は俺のライフを削ることはない」

アリア「そ、そんなことないよ！確かにいつもはそうだけど…でも今日は違うもん！絶対勝つもん！」

俺の言葉にアリアは必至で反論する。

「お前いつもそんなこと言ってるよな……」

アリア「ん〜…もう！そうやってまた私のペースを乱そうとするんだから〜！ターンエンドだよ〜！」

手札：3枚 LP：4000

さて…とはいえ、あまり悠長に構っててもらえないな。

「俺のターン、ドロー！」

よし、このカードなら『甲虫装機』のコンビネーションを崩すことができる。

そのためにはまずはこのカードで…。

「速効魔法『サイクロン』を発動。フィールドの魔法・トラップカード一枚を破壊する。装備カード状態となっている『甲虫装機』は装備魔法扱い。よって、『ホーネット』を破壊する！」

フィールドに発生した竜巻は、『センチピード』のパイルバンカーを吹き飛ばす。

アリア「うっ…でも次のターンでまた装備させれば…！」

「さらに、『デュナミス・ヴァルキリア』を召喚！」

【デュナミス・ヴァルキリア】 4 ATK / 1800 DEF /
1050 天使族 光

「『デュナミス・ヴァルキリア』で『ダンセル』に攻撃！ エンジ
エル・ダスト ー！！」

『デュナミス・ヴァルキリア』が放つ光の粒子によって、『ダンセ
ル』は消滅する。

アリア「くうっ…！」

LP4000 3200

「さらにカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

手札：2枚 LP：900

アリア「えっ…ターンエンド!？」

ルイン「どういうつもりだま…！『センチピード』をフィールドに
残したままでは、また効果によって『ホーネット』を装備されてし
まう！そうなればまたカードを破壊されて…」

いやルイン…これでいいんだ。全ては俺の伏せたりバースカードに
答えがある。

アリア「な、なんだかよくわからないけど…私のターン！」

だが万が一、ここでモンスターを引かれたら少しマズいかもしれん

が…。

アリア「(うつつ…召喚できるモンスターがない…)わ、私は『センチピード』の効果発動!対象のモンスターは…!」

ふっ、アリア。やはりお前はツメが甘いな。

「チェーンだ、リバースカードオープン!速効魔法『禁じられた聖杯』!」

アリア「ふえっ!?!」

「『禁じられた聖杯』は、対象にしたモンスター1体の攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、そのモンスターの効果を封じる。対象はもちろん、『甲虫装機 センチピード』!」

甲虫装機 センチピード：ATK/1600 2000

「これで『甲虫装機』同士のコンビネーションは断ち切れた!」

アリア「でも攻撃力は2000にアップしたよ!このままバトル!『センチピード』で『デュナミス・ヴァルキリア』を攻撃!」

『センチピード』が Cutter を構え、『デュナミス・ヴァルキリア』に向けて放つ!

「アリア、俺がお前のモンスターを『聖杯』の効果で攻撃力を上げたのには、もう一つわけがあるんだぜ?」

アリア「へ…?」

「リバーズカードオープン！トラップカード、『光子化^{フォトナイス}」！相手モンスター^{フォトナイス}の攻撃宣言時、その攻撃を無効にする！」

『デュナミス・ヴァルキリア』の身体が光の粒子となって消え、『センチピード』の Cutter は虚空を切る。

アリア「粒子化した!?!」

「粒子化じゃなくて光子化だ。さらにその相手モンスターの攻撃力分だけ、俺のフィールドの光属性モンスター1体の攻撃力は、次の俺のターンのエンドフェイズ時までアップする」

アリア「なっ…!」

粒子化した『デュナミス・ヴァルキリア』はフィールドに舞い戻り、更なる力を得て輝きを増す。

デュナミス・ヴァルキリア：ATK/1800 3800

ルイン「おお！攻撃力が大幅に増大した！そうか、主は自分のモンスターをパワーアップさせるためにも『禁じられた聖杯』を！」

アリア「う、うまいコンボね…私は一枚カードをセットしてターンエンド。そしてエンドフェイズ時、『センチピード』の攻撃力は元に戻る」

甲虫装機 センチピード：ATK/2000 1600

手札：4 LP：3200

「俺のターン、ドロー！」

ドローカード：『エンド・オブ・ザ・ワールド』

このカードは…ルインの儀式魔法…！

ルイン（主よ、引き当てたか）

だが今はまだ使えない。今俺がやるべきことは…。

「バトルだ！『デュナミス・ヴァルキリア』で『センチピード』に攻撃！ フォトナイズ・エンジェル・ダスト ！！！」

攻撃力が3800にまで跳ね上がった『デュナミス・ヴァルキリア』の攻撃は、『センチピード』を消滅させ、アリアのライフポイントを大きく削る。

アリア「うづうづ…！」

LP：3200 1000

ルイン「おお！ついに主とアリアとのライフポイント差が100にまで…！」

「どづした？もうおしまいか？」

アリア「ま…まだまだ！この程度じゃ終わらないよ！」

「なら、カードを一枚セットして、ターンエンドだ。そしてこのエンドフェイズ時、『デュナミス・ヴァルキリア』の攻撃力は元に戻る」

デュナミス・ヴァルキリア：ATK/3800 1800

手札：2枚 LP：900

さあて、これで俺の方が若干有利になったわけだが…アリア、お前はどつ出る？

アリア「このエンドフェイズ時に永続トラップ発動！『リビングゲデツドの呼び声』！この効果で、私は墓地の『甲虫装機 ダンセル』を特殊召喚！」

ルイン「またあのモンスターか…これでは、次のターンで『ホーネツト』を装備され、主のカードを破壊されるうえにモンスターまで増やされてしまう…！」

アリア「そして私のターン、ドロー！（こんなところで…終われないんだから！）」

アリアもまだまだこんなところで負けるつもりはないらしく、力強くカードをドローする。

ふっ…どうやらあいつも、デュエリストとしては一人前の誇りを持つてみたいだな。

アリア「（よしっ…！）まずは魔法カード、『おろかな埋葬』を発

動！私のデッキからモンスター1体を墓地に送る！私は『甲虫装機
ギガマンテイス』を選択！そして『ダンセル』の効果発動！墓地
の『ホーネット』を装備し、装備を取り外してカード一枚を破壊す
る！私が破壊するのは…そのリバーズカード！」

パイルバンカーから杭が放たれ、俺のリバーズカードに迫る！

「チェーンしてトラップ発動！『和睦の使者』！このターン、俺の
モンスターは戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも受けない！」

アリア「フリーチェーンで発動できるカード…どうやらこのターン
で決めるのは無理みたいね」

アリアの口ぶりからすると…来るな。アリアのエースモンスターが。

アリア「装備カードを外したことにより、『ダンセル』の効果発動
！デッキから『甲虫装機 ギガウィービル』を特殊召喚！」

【甲虫装機 ギガウィービル】 6 ATK / 0 DEF / 260

0 闇 昆虫族

アリア「さらに魔法カード、『共振装置』を発動！自分フィールド
に種族・属性が同じモンスター2体を選択して発動！選択したモン
スター1体のレベルは、もう1体のモンスターと同じレベルになる
！私は『ダンセル』のレベルを『ギガウィービル』と同じレベル6
にする！」

「同じレベルのモンスターが2体…！」

やるつもりだな…あの召喚を！

アリア「いつくぞう 私はレベル6の『甲虫装機 ギガウィービル』
と『甲虫装機 ダンセル』をオーバーレイ！」

フィールドに銀河のような渦が発生し、それに『ギガウィービル』
と『ダンセル』は吸い込まれる。

アリア「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築」

やがて2体のモンスターは重なり合って星となり、ネットワーク空
間によって出現した巨大なモンスターの周りを回る。

て -

- 無敵の装甲をその身に纏い

！ -

- 神秘のボディが光りを放つ

れ！！ -

- 気高き姿よ、敵を貫く刃とな

アリア「エクシード召喚！装着せよ、『甲虫装機 エクサビートル』

「!!」

【甲虫装機 エクサビートル】 6 ATK/1000 DEF/
1000 闇 昆虫族 エクシーズ

地面を割って出現したのは、黒と金の装甲を纏った巨大なカブトムシ型の甲虫装機モンスターだ。その巨体の周りには、二つの星が軌道を描いて回っている。

『エクサビートル』はその手に持つ槍を構え、俺の前に対峙する。

ルイン「な…なんだ!?この巨大なカブトムシは…!」

「出てな…『エクサビートル』!アリアのエースモンスター…!」

だが俺にだってエースモンスターはいる…。

待ってるよ…破滅の女神の力、見せてやるぜアリア!

続く。

第3話：「装着！甲虫装機（インセクター）コンボ」（後書き）

使ってみてわかる甲虫装機の強さ。

下手したら後攻1ターン目で主人公のライフ無くなってたぞw

第4話：「破滅の女神、光臨」

アリア「どう？私の『エクサビートル』の勇姿は！」

ルイン「だ、だが攻撃力はたった1000だぞ！？あの攻撃力では…！」

アリア「さあ、それはどうか？『エクサビートル』の効果発動！エクシーズ召喚成功時に自分、または相手墓地のモンスター1体をこのカードに装備する！またまたいくよ？ゼクト・イーキューップ…！」

ルイン「『エクサビートル』も装備効果を…！」

ルインが驚くのも無理はない。

アリアのエースモンスター、『エクサビートル』は他のモンスターを装備し、その攻撃力を己の力として吸収することで、低い攻撃力を補うのだ。

アリア「装備対象のモンスターは私の墓地の『甲虫装機 ギガマンティス』！」

『エクサビートル』の両手に『ギガマンティス』の鎌が装着される。

「この効果で装備したモンスターの攻撃力の半分が、『エクサビートル』の攻撃力に加えられる」

ルイン「ということは攻撃力2200…！」

「違うな、装備状態の『ギガマンティス』には効果がある。装備モンスターの元々の攻撃力を2400にするという効果が…！」

アリア「その通り！よって『エクサビートル』の元々の攻撃力は2400となり、さらに『エクサビートル』自身の効果に加え、その攻撃力は…！」

甲虫装機 エクサビートル：ATK/1000 2400 3600

ルイン「攻撃力…3600…！」

アリア「さらにさらに！『エクサビートル』の効果発動 1ターンに1度、オーバーレイユニット1つを取り除き、自分と相手フィールドのカード1枚づつを墓地に送る！私は『リビングデッドの呼び声』と『デュナミス・ヴァルキリア』を選択！ 甲神封印エクサ・キャリバー…！」

オーバーレイユニットになっている『ギガウィービル』を取り除くと、『エクサビートル』の周りを回っている星の一つが槍に吸収される。そして槍は輝き出し、その光は俺の『デュナミス・ヴァルキリア』と『リビングデッドの呼び声』を貫いた。

「くっ…この効果を考慮しての『リビングデッド』か…！」

『リビングデッドの呼び声』は蘇生させたモンスターが破壊さえされずにフィールドを離れれば後はフィールドに残り続ける。その効果をうまく利用した見事なコンボだ。

アリア「そしてバトルフェイズ！…といきたいけど『和睦の使者』の効果で戦闘ダメージは受けないのでね、ターンエンドよ。でも次

の私のターンで必ず勝ってみせるんだから！」

手札：3枚 LP：1000

そっだ…『エクサビートル』のオーバーレイユニットはまだ一つ残っている。つまり、俺がこのターンでどんなモンスターを出そうが、『エクサビートル』を破壊できなきゃことごとく除去されてしまうということだ。

ということはこの状況を覆すには、俺はこのターンで逆転の一手を引き当てなくてはならない…！

「俺のターン…」

正真正銘、これが俺の最後のターンだ。

「…ドローっ…！」

デュエルディスクから力いっぱい、カードを引き抜いた。引いたカードは…？おそろおそろ引いたカードを覗きこむ。

「…！ アリア、このデュエル…俺の勝ちだ！」

アリア「なっ…！？」

「俺は『マンジュ・ゴッド』を召喚する！」

【マンジュ・ゴッド】 4 ATK/1400 DEF/1000

光 天使族

「『マンジュ・ゴッド』が召喚に成功した時、デッキから儀式モンスター、または儀式魔法1枚を手札に加える。俺は儀式モンスター、『破滅の女神ルイン』を手札に加える！」

アリア「儀式モンスターを…まさか、儀式召喚するつもり!？」

ルイン「いくか…主！」

「儀式魔法、『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動!レベル合計が8になるようモンスターを女神光臨のための供物に捧げる!俺はフィールドの『マンジュ・ゴッド』と、墓地の『儀式魔人プレサイダー』を生け贄にする！」

アリア「なっ…!墓地のモンスターを生け贄にですって!？」

「『儀式魔人プレサイダー』は、儀式召喚時に墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで、儀式召喚に必要なレベル分として使用することができる！」

アリア「『プレサイダー』…そのモンスターは確か、最初のターンに『終末の騎士』の効果で墓地に送ったカード…!」

「これで儀式召喚の条件はすべてクリアした!俺は2体のモンスターを生け贄に捧げる！」

生け贄になった2体のモンスターは、それぞれ光と闇の力を形作り、その力を得て、破滅の女神光臨の儀式は行われる。

- 破滅を司りし混沌のイデア -

- 煌めく天の名の下に -

- 邪討ち被つ矛先となれ！ -

「儀式召喚！光臨せよ…『破滅の女神ルイン』！！」

フィールドに魔法陣が出現し、その魔法陣から光と闇…二つの混沌の力を得た破滅の女神が、フィールドから出現する。

【破滅の女神ルイン】 8 ATK / 2300 DEF / 2000

光 天使族 儀式

アリア「破滅の女神…ルイン…！」

ルイン「ついに召喚したな、主よ」

「どうだアリア！これが俺のデッキのエースモンスターだ！」

アリア「エース対決ってわけ？でもその攻撃力じゃ、私の『エクサビートル』の足元にも及ばないわよ」

甲虫装機 エクサビートル：ATK / 3600

破滅の女神ルイン：ATK / 2300

ルイン「確かに…せっかく呼び出しても、この攻撃力差では勝負に

すらならない…」

「それはどうかな？」

アリア「なんですって…？」

「これが俺の切り札だ！手札から速効魔法、『禁じられた聖槍』を
発動！」

アリア「『禁じられた聖槍』…？」

フィールドに1本の槍が出現し、『ルイン』がその槍を手に持つ。

「このカードは、対象にしたモンスター1体の攻撃力を800ポイ
ントダウンさせる！その効果対象は…『甲虫装機 エクサビートル』
！」

『ルイン』は手に持った槍を振り翳し、『エクサビートル』に向け
て思いっきり投擲する。

エクサビートル『グオツ…！』

アリア「『エクサビートル』！」

放たれた槍は『エクサビートル』の腹部に突き刺さり、『エクサビ
ートル』は苦痛の声をあげる。

アリア「でも攻撃力が800下がったからってまだ『エクサビ
ートル』の攻撃力は2800！『破滅の女神ルイン』よりも攻撃力
はまだ…！」

そう言っアリアは『エクサビートル』の攻撃力を確認してみるが
…。

甲虫装機 エクサビートル：ATK/3600 1400

アリア「ええっ!? な、なんで攻撃力がこんなに下がってるの!?」
予想外に下がっている『エクサビートル』の攻撃数値を見て、アリアは慌てふためく。

「『禁じられた聖槍』は攻撃力を下げるだけでなく、対象にしたモンスターを1ターンの間あらゆる魔法・トラップの効果を受けなくする効果がある」

アリア「それで何で攻撃力がさらに下がるの!? 『ギガマンティス』の効果はモンスター効果だから……あっ!!」

「ふふっ、気付いたようだな。違っぜ、モンスター効果じゃない。さっき『サイクロン』のときに言っただろ?」

『装備カード状態となっている『甲虫装機』は装備魔法扱い。よって、『ホーネット』を破壊する!』

『』

アリア「装備魔法…扱い…」

「その通り！よって、『禁じられた聖槍』の効果で『エクサビートル』は『ギガマンテイス』からの効果を受けず、結果その攻撃力は『エクサビートル』自身の効果でアップした数値分から『聖槍』の効果で800ポイント引かれた数値となっただけだ！」

甲虫装機エクサビートル：ATK/3600 2200 1400

アリア「こんな…こんなことって…」

「バトルだ！『破滅の女神ルイン』で『甲虫装機 エクサビートル』に攻撃！破滅の序曲、エンド・オブ・ハルファス…！」

『ルイン』はロッドを翳し、その切先を『エクサビートル』に向け、魔力の塊を放つ。その攻撃により、『エクサビートル』は消滅し、攻撃の余波がアリアを襲う。

アリア「うああああっ…！！」

LP1000 100

アリア「だ…だけどまだ私のライフポイントは残っている…次のターンで体勢を立て直せば…！」

「言っただけだアリア、このターンで俺の勝ちだと！『ルイン』の効果発動！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊したとき、もう1度続けて攻撃できる！」

アリア「えっ！？う、嘘おっ！？」

「ダイレクトアタックだ！虚影潜攻、シャドウ・ハルファス…！」

『ルイン』の背後に立つ巨大な影が地面に溶け込み、そのままアリアのフィールドまで伸びて、巨大な影が包む。

アリア「きゃあああああっ！！」

LP1000

……

……

…

アリア「はあくあ…負けちゃった…。今日は勝てると思ってたのになあ…」

「まあまあ、アイスでも奢ってやるから機嫌直しなっ」

見事デュエルに勝利した俺は、優勝賞品として1万円分の商品券を手にした。

アリア「…なら私トリプル頼んじゃうからね！」

「はいはい」

デュエル大会が終わった後、俺達三人は屋上のアイスクリーム屋で休憩することにした。さっきまで俺達が戦っていたステージでは、今はカイバーマンショーをやっている。

俺はそれを見ながら、買ってきたアイスクリームをルインとアリアに渡す。

「味は勝手に決めさせてもらったぞ」

アリア「いいよいよよ〜 ん〜、おいひ〜」

アリアはストロベリー、チョコ、オレンジの味のアイスが重なったトリプルを美味しそうに食べる。よかった、どうやらこれで機嫌は直ったみたいだ。

一方、ルインは手渡したアイスクリームをしげしげと眺め、不思議そうな顔をしている。

ルイン「これがアイスクリームか。どうやって食べれば…冷たつて、手に垂れてきたぞ!？」

「ああもう、ほらアリアの方をよく見るよ。ああいう風に食べるんだよ」

俺は夢中でアイスクリームを頬張るアリアの方を指で差す。

アリア「ひよ、ひよっほ! わはひをれいにしなひでほ! (ちょ、ちょっと! 私を例にしないでよ!)」

「食ってから喋れ」

ルイン「なるほど、こういう風に直接口で…ん…甘くて美味しいな手に付いたのも…んちゆ」

「……」

ルイン「ん? どうしたある…弟よ? 溶けるぞ」

「うえ!?! あ、ああうん、そ、そうだな」

いかん…ただアイスクリームを食べてるだけなのに変な想像をしてしまった。なんでバナラアイスにしたんだる俺…。

アリア「ゴツクン…あゝ、もしかして今いやらしいこと考えてたでしよ〜？」

「か、考えてない考えてない！」

アリアの奴め…なんで女っていうのは、こついつとときに限って勘がいいんだか…。

アリア「そういえばさあ、あの『破滅の女神ルイン』ってカード、お姉さんに似てるね。名前も同じだし」

ルイン「似てるもなにも、あれはわた…むぐつ!？」

「そ、そんなことないって!気のせい気のせい!」

アリア「あはは だよね〜」

うつかり暴露しそうになったルインの口をあわててふさぐ。本当になんで今日はこんなに勘がいいんだか…ニュー イプかよ。

アリア「よっし、今日は奢りだしどんどん食べるぞ〜」

「ま、まだ食うのかよ!？」

ルイン「弟、私もお代わりが食べたい」

「…ああ〜もうっ！」

勝者がいつも報われるとは…限らないんだなあ…。
私は、敗者になりたい…（今だけ）。

……

……

…

アリア「じゃ〜また学校でね〜」

ルイン「さらばだ」

「…じゃーな」

そんなこんなで夕方。デパートの前でアリアとは別れ、俺達は帰路につく。

「…はあ」

自然とため息が出た。

あの後、ルインの服代や下着代やらなんやらがかかっただけでなく、アリアとルインのアイスクリームのお代わりで一万円分の商品券はあつという間に無くなった。せつかく新しいストラクチャーを買おうと思ってたのに…。

アリア「今日は楽しかったな、また行きたいぞ主」

「俺はもう行きたくない…」

ご機嫌なルインを他所に、俺は両手いっぱい荷物を抱えながら答えた。

アリア「ふふっ、デュエルする主の姿は初めてみたが、なかなかかっこよかつたぞ」

「…そりゃどうも」

ルイン「まあソリッド…なんちゃらの私の姿はもつとかっこよかつたけどな！」

「…あつそ」

褒めてくれたのは正直嬉しかったが、その後の言葉で俺はどっと疲れが出た。

帰ればまた飯とか作んなきゃいけないな…それを考えると足取りも重い。

ルイン「それと主…私の髪の色は…変なのか？」

「…」

急に楽しそうだったルインの顔が、一瞬曇る。

こいつ…さっきの子供の言葉を気にしてたのか。

「…気にするな、俺は結構好きだぞ」

ルイン「そ、そうか！なら…よかった」

俺の言葉を聞いたとたん、ぱあっと表情が一気に明るくなるルイン。

全く…喜怒哀楽の楽しい奴だ。

俺の方はといえば、今後の生活をどのように送っていくかを考えていた。

いろいろ不安はあるけど…まあここまで来たらなるようになるなれだな。

第4話：「破滅の女神、光臨」(後書き)

というわけで初デュエル回でした。

やっぱり5D's見ちゃうとシンクロ召喚以外の召喚にも口上付け
たくなっちゃういますよねw

デュエル内で、なにか不備があればお知らせ下さい。

おまけ 〈今日の最強カード〉

〈今日の最強カード〉

「さて始めました、『今日の最強カード』コーナー」

ルイン「このコーナーではそのデュエル中に登場し、活躍したカード一枚を題材にいろいろな考察をまとめていくぞ」

「記念すべき第一回目を飾るカードはこちら！」

【破滅の女神ルイン】

8 ATK/2300 DEF/2000 光 天使族 儀式

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。フィールドか手札から、レベルの合計が8になるようカードを生け贄に捧げなければならぬ。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「出ました、この小説のメインヒロインにして主人公の切り札でもあるモンスター！『破滅の女神ルイン』！」

ルイン「このモンスターは戦闘によってモンスターを破壊すれば、さらに続けて攻撃できるという能力を持っている。せっかく二回も攻撃できるなら、『オネスト』などで攻撃力を大幅にアップしてから攻撃したいな」

「ん？なにになに？そんなモンスターよりも『ワーム・ウォーロード』や『デーモンの斧』装備した『不意打ち又座』の方が強いって？なるほどなるほど…おい、デエルしろよ」ガタッ

ルイン「お、落ち着け主！だ、だが…実際のところそれはどうなんだ？」

「…まあ確かに、ただ二回攻撃したいだけならそれらを使えばいいさ。だがごちとらは儀式モンスターだ。儀式モンスターには儀式モンスターなりの戦い方ってやつがあるのさ」

ルイン「例えば？」

「例えば儀式のリリースに『儀式魔人プレサイダー』を使用すれば、二回の攻撃でモンスターを二体葬れば二枚もカードをドローすることができる」

ルイン「儀式召喚は手札を多く消費するからな。手札アドバンテージが増えるのはありがたい」

「また『ルイン』召喚の際に『高等儀式術』を使い、極力カードを消費せずに儀式召喚するという手もある。このとき『高等儀式術』の効果でデッキから墓地に落とした通常モンスターでコンボを決めるという方法もある」

ルイン「ふむふむ、どのようなコンボだ？」

「『ルイン』のレベルは8なので通常モンスター最強の『青眼の白龍』を墓地に送ることができる。墓地に落としたあとは『正統なる

血統』やら『リビンググデッドの呼び声』やらで特殊召喚すれば、『ルイン』と『青眼の白龍』の二体がフィールドに揃うってわけだ。しかも、『青眼の白龍』を特殊召喚する効果を持つ『白竜の聖騎士』も儀式モンスターだし、それらのモンスターはすべて光属性なので『オネスト』も共通して使えるぞ」

ルイン「なるほど、最上級モンスターを墓地に落として特殊召喚する…か」

「もう一つは墓地に光と闇のモンスターを落とし、それらを除外して『カオス・ソーサラー』や『カオス・ソルジャー 開闢の使者』を特殊召喚するデッキだ。『ルイン』と『カオス・ソーサラー』がフィールドに揃えば、擬似的に『開闢』が出現していることになるぞ」

ルイン「私と『カオス・ソーサラー』の攻守が一緒だということも、それを考慮しているからかもしれないな」

「まあよく使われるのはこの二つかな。他にも『高等儀式術』で下級天使をいっぱい墓地に落として『大天使クリスティア』を召喚したりだとか、コンボはいろいろあるけど今回はここまで」

ルイン「みんなも私のカードをいっぱい使ってくれよな〜！」

「それじゃまた次回！」「ノシ」

アリア「わ、私の『エクサビートル』は？」

おまけ 〽今日の最強カード〽 (後書き)

ちよつとしたおまけコーナーです。

G Xの最後にやってたアレを、詳しい解説付きでやってみました。

第5話：「女神様の学校見学」

ルイン「……暇だ」

壁にかけてある時計という物を見ると、長い針が5を、短い針が10と11の間を指している。

今、主は家にはいない。主は学校というところに行っているらしく、私は一人で家の留守番をしている。

あれほど夢中になっていたテレビだが、さすがに長い間見ていると目が疲れてきて、今はもう電源を切つてある。

暇で暇で仕方がないが…外に出るわけにはいかない。何故なら今朝、主は私にこう言ったからだ。

（（

『いいか？俺は学校に行くてくるけど、俺が帰ってくるまで家で大人しくしてろよ？この前みたいに迷子になつても知らないからな？』

ルイン『わかつている。私は外に出なければいいのらう？』

『わかつているならそれでいい。じゃ、行ってくるからな』

ルイン『行つてらっしゃい、主』

（（

…と、主と約束したからな。

主が行っている“学校”という所もどんな所か行つてみたいが、外に出たら怒られるしな…。

ルイン「はあ……ん？あれは……」

深いため息をついて、私はふとソファの方を見た。
そこには妙な白い袋がぼつんと置いてあった。

ルイン「なんだこれは？……これは確か、ジャージとかいう主の衣服……」

袋の中身を見てみると、買い物の際、主が私に着せたジャージという衣服が入っていた。

確か今日、学校で使うと聞いていたのだが……。

ルイン「主が忘れていったのか」

その時、頭の中である考えが閃いた。

ルイン「よ、よし。これが無ければ主は困るだろう。ならば、私が学校に行って届けてやるのではないか。こ、これは非常時だからな、非常時だから仕方ないのだ」

独り言のように何度も自分の中で『非常時』という言葉を使い聞かせる。このジャージが無ければ主は困るのだから、もしこれを私が主の元に届ければ、主はきっと怒らず、むしろ褒めてくれるはずだ。故に、外に出たことを咎められることはないだろう。

ルイン「そうと決まれば……さっそく！」

第5話：「女神様の学校見学」

「あゝ……しまったなあ」

ホームルーム終了後、俺は持ってきた持ち物を何度も確認してみたが…やはり無い。
家に忘れてきたのか…。

アリア「どうしたの？」

俺の隣の席に座るアリアが心配そうに尋ねてくる。

「いや…今日体育があるのにジャージを忘れてな…」

アリア「ありゃりゃ…他のクラスの子から借りてくれば？」

「…いよいよとなったらそうするかな」

キーンコーン…

授業開始を告げるチャイムが鳴り、一時間目の授業担当の教師が教室に入ってくる。

生徒A「きりーっ、礼」

「オハヨーゴザイマースノ」

教師「はい、おはよう。さて、今日は教科書の38ページを……」

授業中、窓際に座っている俺はふと外の景色を見た。

いつもと変わらぬ窓際から見えるその景色……だが今日は違う。なぜなら、その場にはあり得ないものが混ざっていたからだ。

「……………?!?」

そこにはこの場にいるはずのない人物、ルインの姿があった。

あんなところでなにをやってたんだか……俺を探しているのか辺りをキョロキョロしている。

…仕方ない。

「あの……先生」

先生「ん？どうした？」

「え……と……ちょっとトイレ行ってきていいですか？」

先生は一瞬ちよっと嫌そうな顔をするが。

先生「早く行ってきなさい」

「ありがとうございますっ！」

教室を出ると同時に、俺は全速力で走りだし、昇降口の方に向かった。

……
……
……

ルイン「あ！主！よかった、今主を探そうと……わっ！？」

俺の姿を見つけて手を振っているルインを無視し、俺はルインの手を引いてグラウンド近くにある今は使われていない運動部の古い更衣室に連れていく。

「ルイン！！！」

ルイン「な、何だ主？」

「何だじゃない！お前なんでこんなところにいるんだ！？家で大人しくしているって言っただろ！」

ルイン「そ、そんな怒鳴らなくなっただっていいじゃないか…わ、私はこれを届けに来たんだ」

怒鳴り口調でルインに問いたただす俺に対し、ルインは手に持っていた白い袋を俺に差し出す。

「これは…」

それは俺が今朝持つてくるのを忘れたジャージだった。

「もしかして…これを俺に届けに？」

ルイン「あ、ああ…済まない、約束を破ってしまって…」

少ししゅんとなつてしまつているルインの姿を見ると、俺の怒りは治まつてしまつた。

「そ、そうだつたのか…それだけならまあいい。今は授業中で誰もいないから、今のうちに早く帰るんだぞ?」

ルイン「あ、いやそれが…」

「どうした?」

ルインからジャージを受け取りそう告げるが、ルインは何か言いたそうだ。

ルイン「その…帰り道がわからないんだ…」

「はあ!? わからないってことはないだろ。じゃあお前はどつやつてここまで来たんだよ?」

ルイン「主は、私のカードを今持っているだろ?あのカードには私の力の一部が封じ込まれているから、その力の足跡を辿つてここまで来たんだ」

「でも辿つて来たなら道を覚えてないのか?」

ルイン「覚えてない…」

ルインは少し申し訳ないという顔をしながら即答で返す。破滅の女神様がそんなんでどうするんだ…。

「はあ…じゃあ仕方ない。授業が終わるまで、ここで大人しく待っているよ?」

ルイン「え?」

「それじゃあな。昼休みになったらまた様子見に来るけど、そこら辺ウロウロするんじゃないぞ?」

ルイン「ちょ、ちょっと待ってくれある…!」

ボタン

まだルインは何か言いたそうだったが、一方的に扉を閉めさせても良かった。

ルインには悪いが、何か問題が起きてからでは遅いからな。

さて…トイレと言って教室を出てからかれこれ10分は経っている、そろそろ教室に戻らなくちゃ怪しまれるな。

(頼むぞルイン、そこから動くんじゃないぞ)

………

……

…

主が出て行ってから少し経った。

ルイン「はあ…つまらないなあ…」

せっかく退屈しのぎになると思ってたのに…これじゃ家にいるのと
なんら変わらないではないか!

窓の外から見える大きな建物…学校というらしいが、あそこがどう
いう風になっているのか是非見てみたい。

ルイン「よし…行ってみよう」

少しくらいならいいだろう。だがこの格好のままでは建物の中に入
ったとしても、誰かに見つければ即刻追い出されてしまいかもしれ
ない。

ルイン「何か変装できる物はないものか…お！」

ちょうどいいことに、この部屋には主の持ってるジャージと似たよ
うな服があったので、それを一着拝借することにした。

ルイン「ちょっとキツいな…」

上のサイズは良いのだが、下に履いた紺色の衣服は少し小さいみた
いで、お尻に食い込んでくる。

しかし多少のことには我慢しなければならぬ。これでどう見ても
この学校の一員だ。

ルイン「よし、まずは主のところに行ってみるとしよう」

………

………

…

ルイン「…主はどこに行っただ？」

長い廊下を進んでいくと、大きな部屋がいくつもあった。

その部屋の一つを扉を少し開けて覗いてみると、大きな黒い板に白い文字を書いている人が一人いる。どんな事が書かれているかはよく分からないが…なんだか難しい事がいっぱい書いてある。その文字を、主と同じ格好をした男や少し違う格好をしている女が真剣に聞き、紙に書き写している。

ルイン「…これが主の言っていた“授業”というやつか？」

なんだか思ったよりも面白そうではないな…。

見つければまた主に迷惑をかけてしまうので、そおくと気づかれない様に扉を閉めて、再び廊下を歩きだす。

???「ん？ちょっとそこの貴女」

ルイン「っ！」

そして、廊下の端まで来て階段に差し掛かったとき、後ろから女の声が出たのでビクツとしてしまう。

落ちつけ…私は今はこの学校の者なんだ、変装をしているからバレるはずがない…。

ルイン「あ…え〜っと…私はこの学校の者で…。」

???「貴女ここの生徒じゃないわね、こんな所で何してるの？」

一瞬でバレた!?

おかしいな…変装は完ぺきなはずなのに…。

ルイン「わ、私はその…」

どろどろ……。…

……

……

…

（昼休み）

やっと昼休みか…さて、購買でパンでも買ってルインに持って行ってやるかな。

アリア「あ…あの…あのさ」

「ん？どうしたアリア？」

アリア「そ…その…今日は私…」

「？」

何だかアリアの様子がおかしいような…。しかしその時、突然教室のドアが開き、教室に入ってきた人物を見て俺は驚愕した。

ガラッ

ルイン「主！」

「る、ルイン！？」

アリア「え…？お姉さん！？なんでこんなところに…？」

突如教室に入ってきたルインを見て、教室内は騒然とする。

「お前…大人しくしてろって…！…！…ってその格好は…」

ルインが身につけているのは、女子用の体育着に…少しサイズの小さそうなブルマだった。

ルイン「すまない主、話は後だ！すぐに私と一緒に来てくれ！」グ
イツ

「お、おい！？」

俺はルインに引っ張られるままに教室の外へと連れ出される。

生徒A「おい見たかよあの人、すげえ美人じゃん」

生徒B「ああ、誰なんだろうな」

アリア「…行っちゃった…。はあ…あ…せっかく今日は一緒にお昼
食べようと思ってたのに…」

………

………

………

く屋上く

「何だっつてんだよ！？」

俺が連れて来られたのは屋上だった。

ルイン「実はあの人が…」

????「来たわね」

屋上にいる人物は俺がよく知る人物だった。

「ひ、響先生…」

その人物は国語教師の響みどり先生だった。

ルイン「あの女に『貴女の保護者を呼んできなさい』って言われたのだ…」

響「ここなら人目につかないでしょ？あなたのお姉さん…だった？その人をさつき廊下で保護したのよ」

全く…外には出るなとあれほど言ったのに…。

「そうだったんですか。じゃあ俺達はこれで…」

響「待ちなさい」

何食わぬ顔で屋上を出ようとしたとき、突然先生に呼び止められた。何だか嫌な予感がするが…。

響「私は教師として、学校内に入った部外者をこのまま見逃すわけにはいきません」

「…校長に言うんですか？」

響「悪いけど、そうなるわね。貴方も一緒に職員室に来てもらおうよ」

くっ…このまま連れてかれたら、俺とルインの関係がバレてしまいかもしれない…！

やはり面倒を起こすわけにはいかない…。

「…わかりました先生。なら、俺とデュエルしましょう！」

響「デュエル？」

「先生が勝つたら大人しく職員室に行きます。でも、俺が勝つたらこの事は無かったことにしてもらいます」

響「あなたねえ…本気でそんなこと言ってるの？」

うっ…やっぱり承諾できないか、こんな申し出…。

響「本気で私とデュエルしたいのかって聞いているのよ？」

…えっ？

「と、当然です！デュエルで勝ってチャラにできるんなら、俺だつて本気になります！」

響「いい心がけね。でも、その程度の本気で私に勝てると思わないことね」

「じゃあ…！」

響「デュエルディスクを取ってくるわ、そこで待つてくなさい」

そう言つて響先生は屋上を出て行つた。

ルイン「よかつた…デュエルに持ち込めば、まだチャンスはある」

「ああ、これ以上面倒なことになる前に、ここでカタをつけるぞ！」

……

……

…

響「久しぶりのデュエルね。でもあの子たちは知らないでしょね…まさか私が元デュエルアカデミアの教師だなんて」

みどりは自分の国語研究室に戻ると、机の中から二つのデュエルディスクを取り出す。

響「ふふっ 私つたら年甲斐もなくワクワクしてきちゃった」

続く。

第5話：「女神様の学校見学」（後書き）

原作・アニメからの登場キャラクタークター記念すべき一人目は響先生です。

一応この作品はアニメ設定を基準としているので、漫画オリジナルキャラはこちらのオリジナル設定で書かせていただきます。

第6話：「墮天使の猛攻」

響「おまたせ」

屋上でしばらく待つと、響先生が二つのデュエルディスクを持ってきた。

先生がいない間に逃げてしまおうか…とも考えたが、それは後々厄介なことになりそうだからやめておいた。

響「デッキは持ってきているわね？」

「ええ」

響「なら早速やりましょうか。これを貸してあげるから着けなさい」

響先生が俺にデュエルディスクを投げ、自分もそのディスクを腕に装着する。

（あれ…？このデュエルディスクって、たしかデュエルアカデミアの…）

俺はそのデュエルディスクを見て少し不思議に思った。

それは一般に市販されているディスクではなく、デュエルアカデミアの生徒が使用するタイプのものだった。

（響先生、デュエルアカデミアに知り合いでもいるのかな）

第6話：「墮天使の猛攻」

ルイン「主、どうした？」

「いや、なんでもない。始めましょうか先生」

「ええ、あなたに特別授業をしてあげるわ」

俺と先生はディスクを起動させ、学校の屋上で対峙する。

「デュエル！！」

響「先攻は私がもらうわ、ドロー」

響先生の實力は未知数だ…一体どんな戦術で来るんだ？

ルイン「なあ主…あのヒビキとかいう女はどんなデュエルをするんだ？」

「それは俺もわからない…なんせ俺は響先生のデュエルを見た事ないし、第一デュエリストだって知ったのもついさっきなんだからな」

響「こらそこ！私語をしないの！」

「す、すいません…」

文字通り、響先生にとってはこれも授業の一環と考えているのだらう。

まるで普段の授業中にするように、俺達を注意する。

響「デュエルにおいて、相手を観察することも重要なことよ。一つ一つの動作を見逃さず、しっかり観察しなさい」

「は、はあ…」

なんだろう…なんだかこの人、まるで俺にデュエルを教えているかのようにも思える。

響「私はカードを四枚セット。ターンエンドよ」

手札：2枚 LP：4000

モンスターを召喚せず、リバースカードだけ…？
手札事故か…それとも、罠か…。

「俺のターン！」

なんいしても…まずは小手調べといこう。それで響先生の出方を見る！

「『マジック・ゴッド』を召喚！」

【マンジユ・ゴッド】 4 ATK / 1400 DEF / 1000
0 光 天使族

「召喚に成功した『マンジユ・ゴッド』の効果発動！召喚時にデッキから儀式モンスター、または儀式魔法を手札に加えます。俺は儀式モンスター、『破滅の女神ルイン』を選択」

デュエルディスクが『ルイン』のカードを選び出し、俺はそれを手札に加える。

響（なるほど…儀式デッキなわけね。それに天使族ってことは…偶然にも私のデッキとはテーマが真逆ね）

「まずは先生の實力を測らせてもらいますよ！バトルフェイズ！『マンジユ・ゴッド』で攻げ…」

響「待ちなさい。バトルフェイズ開始時にトラップ発動！」

このタイミングでトラップカード！？

響「フェイズの確認はきちんと行わないとダメよ？トラップカード『暗黒の謀略』！互いのプレイヤーは手札を二枚捨てたあと、デッキから新たにカードを二枚ドローする。でもあなたが手札を一枚捨てればこの効果を無効にできるけど、どうする？」

なんだ、なにかと思えばただの手札交換用のトラップか。

さては先生…本当に手札が事故ってるんですね？

そして俺に手札を捨てさせ、少しでも俺のアドバンテージを減らすって…という作戦なんだろうけど…悪いけどそうはいきませんよ。

それに、俺の手札には手札よりも墓地にいてくれてた方がありがた

いモンスターがいますからね。

「いえ、俺は無効にはしません。手札のカードを二枚捨て、二枚ドローします」

響「あらそう？なら私もカードを二枚捨て、二枚ドロー」

この分だと響先生はデュエルの素人らしいな。先生には悪いが、この勝負もらった！

ルイン（主のあの余裕の表情…ヒビキが素人だと確信しているという顔だが…果たしてそうなのか？私は気になる…仮に手札事故を起こしていたにせよ、何故このタイミングで手札交換のカードを使用したのが…）

「改めてバトルだ！『マンジュ・ゴッド』でダイレクトアタック！」

『マンジュ・ゴッド』が幾本もの手を伸ばし、攻撃の態勢をとる…が。

響「リバースカードオープン！」パチンッ

「なっ…！？」

響先生が指を鳴らすと同時に、伏せてあったリバースカードの一枚が発動する。

響「永続トラップカード、『リビングデッドの呼び声』！この効果で、墓地のモンスター1体を特殊召喚する！」

「モンスター蘇生のカード！？つてことは…『暗黒の謀略』で捨てたモンスターを！？」

響「当然。見せてあげるわ…これが私の天使よ！降臨なさい！」
堕天使スペルビア『！！』

【堕天使スペルビア】 8 ATK / 2900 DEF / 2400
0 闇 天使族

「す…『スペルビア』だと！？」

『堕天使スペルビア』…あのモンスターはめつたなことでは手に入らない超ウルトラ級のレアカード…！何故それを響先生が！？

響「『スペルビア』の効果発動。このモンスターが墓地から特殊召喚されたとき、墓地の天使族1体を特殊召喚する！来なさい…『堕天使エデ・アーラエ』！！」

『スペルビア』の頭の中から二体目の堕天使が姿を現す。

【堕天使エデ・アーラエ】 6 ATK / 2300 DEF / 2000
000 闇 天使族

ルイン「堕天使が…二体だと！？」

「さ…最初からこのために手札交換のカードを…！」

響「さあどうする？私のフィールドにモンスターが増えたけど、攻撃は続ける？」

「くっ… 攻撃中止！メインフェイズ2に入ります！」

だが… 俺にだって『暗黒の謀略』のメリットはあった、あれのお陰でこのカードを引くことができた。

トラップカード… 『光子化』^{フォトナイス}。相手モンスターの攻撃を無効にし、相手モンスター1体の攻撃力分、俺の光属性モンスターをパワーアップさせるカードだ。

これさえあれば上級モンスターがいくらいようとも…！

「俺はリバーズカードを二枚セットし、ターンエンドです」

手札：4枚 LP：4000

響「私のターン、ドロー！私はトラップカード、『レベル変換実験室』を発動！」

「『レベル変換実験室』…？」

ルイン「主、なんだあのカードは？」

「わからない…見たことないカードだ」

響「あまり使われていないからといって、知識を疎かにしてはダメよ。思わぬコンボを思いつくことだってあるんだから。このトラップカードは、手札のモンスター1体を選択して相手に見せ、サイコロを1回振るわ。1の目が出た場合そのカードは墓地に送られ、2〜6の目が出た場合モンスターのレベルは出た目と同じになるわ」

「なっ！？じゃあ最上級モンスターをコストを軽減して召喚できる
ってことか！？」

響「その通り。私はレベル8のモンスター、『墮天使アスモディウス』を選択！サイコロを振るわ」

ソリッドビジョンのサイコロが出現し、フィールドをコロコロと転がる。

(1の目…1の目さえ出れば墓地行きだ！)

確立は六分の一だが…それでも可能性はある！

コロコロ…コロ…

サイコロが…止まる！

(出た目は…?)

響「ふふっ…出た目は3！よって手札の『アスモディウス』のレベルは8から3に変換されるわ！」

墮天使アスモディウス： 8 3

ルイン「上級モンスターが…下級モンスター並のレベルに…！」

「くっ…！」

響「そして通常召喚…舞い降りなさい！『墮天使アスモディウス』

…！」

【墮天使アスモディウス】 8 3 ATK / 3000 DEF
/ 2500 闇 天使族

「だ…墮天使が…3体も…！」

ルイン「しかもどれも…高攻撃力で高レベルばかり！」

今頃俺は悟った…。

最上級モンスターをここまで使いこなすカードのプレイングテクニク…間違いない、この人は素人なんかじゃない！

「先生…あんた一体何者なんだ？」

響「私？私はなんでもない、ただの公立高校の国語教師よ」

「嘘だ！さつきから思ってたけど、あんたのカードプレイングは並のものじゃない！それにそんなレアカードまで使ってるし…あんたもしかして…！」

響「…隠しても無駄みたいね。そう、実は私はねデュエルアカデミアの教師よ。元だけどね」

「やっぱり…！」

ルイン「主、なんだその…デュエルなんとかというのは？」

「デュエルアカデミア…それは将来デュエリストを目指す子供達のために設立されたデュエリスト専門の養成学校だ。そこにおける教師とは、常に生徒達の見本にならなくてはならないため、必然的に高

度なデュエルテクニックを持っている」

ルイン「じゃあ…!」

「響先生がその元教師だとするなら…このデュエル、最初から俺に勝ち目なんてないんじゃないか!？」

響「あら、私がアカデミアの教師だからって、貴方が負けたわけじゃないでしょ？結果がまだわからない状況で勝負を諦めることは、デュエリストが最もしてはいけないことよ？」

「っ…」

そうだ…響先生がアカデミアの教師だからって、まだ俺が負けたわけじゃない。

このリバーズカードだってあるんだ、来るなら来てみる!

響「バトルフェイズ…いくわよ!まずは『墮天使エデ・アールエ』で『マンジユ・ゴッド』に攻撃!」

『エデ・アールエ』が太い腕を翳し、『マンジユ・ゴッド』に迫る!

「今だ!トラップ発動!『フォトナイス光子化』!」

響「…!」

「このトラップカードは、相手モンスターの攻撃を無効にし、その攻撃力分俺の光属性モンスターの攻撃力をアップさせる!」

『マンジユ・ゴッド』の身体が徐々に光子化していく。

ルイン「よし！これで『マンジュ・ゴッド』の攻撃力は『エデ・ア
ーラエ』の攻撃力分アップし…！」

響「甘いわね…リバーストラップ発動！」パチンツ

響先生がまたも指を鳴らし、伏せてあるリバーズカードを発動する。

響「トラップカード、『トラップ・スタン』！このターントラップ
カードの効果を無効にする！」

「なっ…！？」

まさか…『光子化^{フォトナイズ}』が読まれていたのか！？

無効にされた『光子化^{フォトナイズ}』はその効力を無くし、『マンジュ・ゴッド』
の光子化が止まる。

どうやら響先生のデッキは、最上級レベルの墮天使達を大量のトラ
ップで守ったり、召喚の補助をするのが主な戦術のようだ。

響「切り札が読まれて焦っているわね。このターンでお終いかしら
？」

「くっ…まだまだ！『トラップ・スタン』にチェーンして永続トラ
ップ、『女神の加護』を発動する！」

響「ほう…」

「この永続トラップカードは、俺のライフポイントを3000ポイ
ント回復させる」

LP：4000 7000

響「『トラップ・スタン』にチェインして発動したトラップカードは無効にできない…なかなかやるわね」

「俺もこのまま、やられるわけにはいきませんからね」

響「いい心意気ね…バトル続行！『エデ・アラーエ』で『マンジユ・ゴッド』にAttack！！エーデル・インサニティ！！」

『マンジユ・ゴッド』は『エデ・アラーエ』の放つ闇の波動によって、消滅する。

「くっ…！」

LP：7000 6100

ルイン「ま、まだまだライフポイントは残っている！」

響「続いて『スペルビア』と『アスモディウス』でダイレクトアタック！『スーペル・グリード』、ヘル・パレード！！」

俺のフィールドに壁となるモンスターはいない。

対抗手段が無い俺は、『スペルビア』と『アスモディウス』の攻撃をマトモに喰らってしまった。

「ぐわああああっ…！」

LP：6100 3200 200

最上級モンスター2体の攻撃の衝撃は凄まじかった。衝撃で俺の身体が後方に吹き飛ばされる。

ルイン「主！大丈夫か！？」

「なんとかな…首の皮一枚で繋がったよ」

ルインの手を借り、起き上がりながら俺は答える。

ルイン「7000もあつた主のライフが…僅か1ターンっで200にまで減らされるなんて…！」

「くっ…やっぱ強いですね、先生」

響「あなたもなかなかやるわね、私の墮天使達の直接攻撃を受けてまだライフが残ってるなんて」

「俺だつてただで負けるわけにはいかない…まだまだこれからです！」

響「いい心意気ね、リバーズカードを一枚セットしてターンエンドよ」

手札：1枚 LP：4000

ルイン（僅か数ターンでここまで自分に有利な状況を作りだしてしまつとは…あのヒビキという女、侮れない。主が勝つ手段は果たしてあるのか…？）

続く。

第6話：「墮天使の猛攻」（後書き）

随分久しぶりに更新します、更新が遅れて申し訳ない…。

響先生のデッキは原作通り墮天使です。

下級モンスターをほとんど使っていないので、再現するのは難しいか
と思いましたが…意外となんとかなるもんですねw

僅か3ターンでライフ200の主人公…なんか毎回しよっぱなから
鉄壁だなあw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2849z/>

遊戯王 ああっ破滅の女神さまっ

2012年1月15日02時46分発行